

## 書 評

Mariasusai DHAVAMONY : Subjectivity and Knowledge  
in the Philosophy of Saint Thomas Aquinas. Gregorian  
University Press, 1965 viii+168.

稲 垣 良 典

本書の表題は、認識の問題に関するスコラ哲学者の思弁はもっぱら「認識の対象および客観性をめぐって行われ、認識主体ならびに主体性にふくまれる精神的な豊かさにはなんらの重要性も認めなかった」（序論）と信じこんでいる人々には奇異な感じを与えるかもしれない。しかし著者によると、認識の形而上学をめざしていとまれた中世スコラ哲学者たちの思索は、たしかに精神的主体の神経中枢とも称すべきものにふれていたものであり、精神的主体の本性および活動に関してすぐれた洞察に到達していたという。本書はこのような見通しの下に、精神的主体は認識においていかなる役割を演ずるのかという問題に関するトマス・アクイナスの立場を解釈しようとする試みである。ついでに記しておく本書はローマのグレゴリオ大学に学位論文として提出されたものであり、インド出身のイエズス会司祭である著者は現在同大学で宗教哲学および宗教史の講義を行っている。

著者はまず第一章でトマスの認識説の重要な前提となっており、したがってわれわれがかれの認識説を理解するための鍵ともいうべき形而上学的な基本思想についてのべる。それは形而上学的連続性の原理と呼ばれるものであり、トマスによって理解された宇宙像の基本的構造を言いあらわすものである。それによると、被造的世界におけるひとつの存在階層（たとえば人間）は、その最高の極限において上位の存在階層（つまり天使）の最低の極限に接し、他方その最低の極限において下位の存在階層（つまり物質的事物）の最高の極限に接している。このような連続は、つまるところ、万物が存在の超越的な根源たる神の完全性を分有し

ていることにもとづくものであり、そのことによって被造的世界の内部に根源的な統一性あるいは連続性が成立しているのである。著者によると、トマスにおける精神的主体ないし主体性の理論は、このような形而上学的連続性の思想にもとづきながら展開されているのであり、そこからして近代における認識主体の理論との間の著しい相違もしくは対照が生じているとされる。なお著者はトマスにおける形而上学的連続性の思想の歴史的源泉について、さらにこの思想において認められる新プラトン派（とくに偽ディオニシウス）の分有説とアリストテレスの可能一現実態説との総合について簡単な説明を試みている。この説明は、一と多、超越と内在、自然と意識、精神と身体などの重要な問題へのひとつのアプローチの可能性を示すものとして興味深い。なお同じ問題にむけられた試論として本誌第八号にエルダース教授の研究が収載されていることを指摘しておきたい（「聖トマスの存在論における基本的構造としての *contineri*」）。

第二章以下において認識における精神的主体あるいは主体性の役割が、より根源的・本質的なものからはじめてより偶然的・付帯的なものにいたるという順序で考察されるのであるが、第二章では存在論的主体性という表題の下に、まず精神的主体そのものの概念があきらかにされる。主体は様々の現象的な性質あるいは付帯性を支えるところの基体という意味もふくむが、より根源的な意味はそれ自体において存在する（*subsistence*）ということであり、結局のところ存在の働きが主体性の原理であることがつきとめられる。主体性を構成する特性として挙げられる内在性、内面性自己同一性などはいずれも存在の働きに由来するものとされ、そしてそのような主体性は精神的（非質料的）存在において見出されるものであることから厳密な意味で主体の名にあたいするのは精神的主体あるいは精神的実体のみであることが確認される。いいかえると、精神的本性に相応するところの精神的な存在の働きが認識の主体を成立させるものであり、また知的認識を成立させる「条件」である、というのが著者の解釈である。

著者はこのような精神的主体たる人間主体を質料のうちなる精神「*(spirit in matter)*」として規定し、これが人間について従来与えられてきた「理性的動物」という定義に比して、有の全体にたいする人間の開放性をよりよく示している点でより優れていると主張する。この規定は人間主体が上位の精神的存在と連続し、

それら二つの存在階層の接点であることを端的に示すものであり、認識主体に関するトマスの説はこのような人間主体の存在論的把握を予想しているというのが著者の主張である。

第三章では精神的主体の考察の次元が存在から働きへ、とくに知的認識の働きへと移される。そこではじめにとりあげられるのは、精神的主体による自己認識の問題である。著者はこの問題を「在る」(esse)と「知る」(intelligere)とはどのような関係にあるのか、という根源的な形で問うている。精神的主体の存在するという働きはそのまま認識の働きであるのか? 「認識することは、認識するものにあつては在ることである」[(intelligere intelligentibus est esse) というトマスのテキストはそのような同一性を肯定するものではないのか。しかし、著者は存在の働きと認識の働きとはトマスにおいて根源的に一であるとするカール・レーナーの解釈を斥け被造物においては存在の働きは「指向的、傾向的」にのみ認識の働きと同一である、と主張する。精神的主体が自らにおいて存在すること、つまり主体が自らにたいして存在論的に現存することは、すべての認識が成立するための「条件」であっても、ただちに認識ではありえない。いいかえると、そこで主体自らにとって現存しているところの主体は、いまだ認識の対象として、あるいは認識されたものとして現存(意識的・心理的現存)しているのではない、というのである。

著者はここから進んで精神的主体の存在論的現存と心理的現存、つまり現実的な認識との中間に精神の習性的自己認識なるものが成立していることを指摘し、それによって前二者は媒介されていると解釈する。この習性的な自己認識は精神的主体の存在論的構造そのものに属するものであり、主体にたいして外から付加されるものではない。しかし、それが主体のうちに現存するにいたるのは主体が自らの外なる対象を認識することをまっぴらである。すなわち、主体がなんらかの対象を認識するとき、それと同時に主体が主体にたいして直接的に現存する。この現存が著者のいう習性的な自己認識であり、それが対象認識の可能性を基礎づける「条件」にほかならない。これを著者は基本的統覚(elementary apperception)とも、精神的な主体経験とも呼び、このような仕方では成就される存在と認識との統一を、神および純粋な精神的実体におけるこの二者の同一性と比較し、

そこに形而上学的連続性が立証されていることをあきらかにする。

第四章では、知的認識の働きにおいて成立するところの精神的主体の主体性が、前章ではまず主体の自己認識としてあきらかにされたのをうけて、それを他者認識の構造を考察してゆくことを通じてさらに厳密に規定しようとする試みがなされる。まず精神的主体たる人間は、神のごとくに存在の全体であるのではないが、神の完全性を分有する者として、存在の全体へと開かれている——すなわち、知的認識によってすべての存在でありうるものが指摘される。ところでこのような人間精神の無限なる開放性は、自己以外の存在へむかっての自己超越であり、いわゆる指向性にはかならないのであるが、それは認識の人間的条件を示すものであって認識そのものの本質に属するのではない。認識そのものをその本質において成立させるのは、あくまで内在性、内面性、自己同一性など、主体性を構成するところの諸特性であるとされる。

したがって、認識は主体が自己以外の存在と合一し、それを自己に同化せしめることによって行われるとするのは、認識の人間的条件の記述にすぎない。認識そのものは、知るものと知られるものとの現実態における同一性である。いいかえると、現実態における知るものと、現実態における知られるものが同一であるときに認識が成立する。ここからして著者は、「知る」とは端的にいうと知るものが知られるものであることにほかならず、この同一性は知るものの内面性において成就され、しかも知られるものはそれ自体において在るかぎりの知られるものである、というふうに説明する。このような、いずれも現実態にあるところの知るものと知られるものとの同一性は、著者によると、非質料的、超感覚的な存在においてのみ成就されるのであるが、その説明は次章においてこころみられる。

本章で論じられた他者もしくは対象認識と、前章で考察された精神的主体の自己認識との関係については、現実の遂行に関していえば前者が先行するが、後者は前者にとっての条件であることがあらためて指摘されている。そして、存在の働き（esse）は主体の直接的な自己認識においてはじめて捉えられるものであるところから、このような自己認識なしには存在の観念はまったく空虚なものにとどまらざるをえないことが強調される。この指摘は形而上学の可能性の問題との関係できわめて重要なものと思われる。

第五章「構成的主体性」においては、認識主体たる人間知性がどのような仕方  
で対象を「構成」し、そのことによって現実に認識を成立させるのかという問題  
が論じられる。もちろんトマスは、対象は認識主体によって構成されるのであり、  
そのことのゆえに主体は対象に到達しうるのだと説く観念論者ではなかった。し  
かしトマスは、対象の可知性は部分的には知性によって構成されると考えており、  
したがって知性そのもののうちにそなわっているところの、対象を可知的なもの  
のたらしめうるような、なんらかの条件もしくは傾向性を構成的主体性と呼ぶこと  
には根拠がないわけではない。

では知性はどのようにして対象を可知的たらしめるのか。著者の見解を要約す  
ると、すべての存在者は存在によって現実化されているのであるが、知性を現実  
化しているところの存在は可知的存在 (esse intelligibile) である。その意味は、  
精神的主体たる知性は、完全に自己に還帰することが可能であり、したがって自  
己を現実化している存在そのものに到達しうる、ということである。そして知性  
はこの可知的存在——いわゆる能動知性の光——によって、対象の存在を開示す  
る、つまり、それを現実に可知的たらしめるのである。ふつうに能動知性の光に  
よって可能的に可知的なる<sup>ファンクシー</sup>感覺的表象が現実的に可知的たらしめられる、という  
ふうに説明されることは、著者の解釈にしたがえば、知性の可知的存在が感覺的  
表象に与えられること、あるいは感覺的表象がそれに参与することとして説明さ  
れるわけである。

知性は存在そのものに到達しうる能力であるとの意味で「存在の能力<sup>ミッセ</sup>」と称せ  
られるが、さきに見たように存在の働きが主体性の原理であるかぎり、それは  
「主体性の能力」と呼ばれるにふさわしい。ところが、知性はそれが存在の能力  
であるがゆえに対象を可知的たらしめることができる——つまり、対象がなんで  
あるかを開示しうるということは、知性は主体性の能力であるがゆえに対象の本  
質に透入し、それをあるがままに知りうる、といいかえることができる。したが  
って、著者によると知性が深い意味での認識の客観性、あるいは真理に到達し  
うる能力であるのは、それがほかならぬ主体性の能力であることにもとづくので  
ある。

第六章「偶然的主体性」で論ぜられているのは、前章で知的認識の成立にさい

して本質的な役割をはたすところの主体的条件が考察されたのにたいして、認識になんらかの影響を与えるところの偶然的な主体的諸条件である。いいかえると、前章では認識主体がもっぱら知的実体あるいは端的に知性として考察されていたのにたいして、この章では精神と身体との合成体として考察されている。人間知性はその固有の機能を遂行するために身体との合一を必要とするほど弱体であり、不完全であること、さらに身体と現実とに合一していることからして人間の知的認識においてはさまざまな偶然的側面が認められるわけである。

著者はそれら偶然的な主体的条件のうちから、分割・結合作用を通じて行われる実在の複合的な把握、表示せられた事物（ないしその完全性）そのものと表示<sup>モーフウス</sup>様態との区別、さまざまな知的ならびに倫理的習性、誤れる認識を生ぜしめる主体的条件、および親和性による認識の問題などをとりあげて論じている。あきらかにここで論じられているのは、われわれがじっさいに知的認識をおしすすめるにあたって直面せざるをえない諸問題であり、認識の実際上の困難さはすべてこれらの問題との関係で生ずるものといえよう。とくに、いずれも短い叙述ながら、著者が明証および誤謬の問題について論じているところは重要な示唆をふくんでいるように思われる。

本書の内容に関して一、二気付いた点をのべると、いくつかの問題に関してトマス自身の思想の発展を指摘しているのが興味をひく（41, 68, 75, 131ページ）。これらの叙述はいずれも簡単なもので、とくに問題としてとりあげる必要は感じられないが、著者がトマスのテキストを解釈するさいのひとつの特徴として指摘しておきたい。つぎに著者は47-8ページにおいてマリタンの人格一個別性概念を、58ページにおいてラーナーの存在一認識の根源的一致に関する立場を批判しているが、その批判は私には適切なものであるとは思えない。後者に関して一言すると、たしかに存在と同一であるといわれるところの *intelligere* はふつうの意味での認識（感覚を通じて対象が与えられることをまって成立するところの認識）ではない。しかし、それがやはり根源的な意味において認識であるとするラーナーの解釈は軽々しく斥けられるべきものではなく、人間を「質料のうちなる精神」と規定する著者自身の立場とも深く相通ずるものであるように思われる。

本書はマレシャルにはじまり、現在ではロッツ、ラーナー、コーレット、ローナーガンなどにおいて、それぞれ異なった仕方で発展せしめられている先験的（ないし超越論的）な認識の形而上学の流れに属するトマス研究である。トマス解釈の試みとしても、認識における主体性と客観性の問題に関する研究としても、慎重な検討にあたいする労作であると思われる。